２０２４年１１月２２日

米海軍原子力空母Ｇ・ワシントンの横須賀入港に抗議するコメント

原子力空母の横須賀母港問題を考える市民の会
共同代表　呉東　正彦

本日原子力空母Ｇ・ワシントンが、米海軍横須賀基地に再配備された。

私達横須賀市民の声を全く聞かずに、原子力空母の原子炉が少なくとも１０年は、首都圏の入り口、横須賀市中心部で稼働し続けるという、原発再稼働に匹敵する３代目の原子力空母の母港化が開始されたことに強く抗議する。

特に昨年９月、原子力空母Ｒ・レーガンが７回にわたる出港予定の中止、変更事件を起こしており、この７回の出港予定の変更は、出港の数時間前に原子炉を起動させたが不具合が見つかった危険性を強く示唆しているが、米海軍は全く情報を明らかにしていない。

また今年１月の能登半島地震と同様の三浦半島の活断層地震、南海トラフ地震等に原子力空母が見舞われた時、福島原発と同様の原子炉事故が起きない保障はなく、そうなれば首都圏一帯が放射能で汚染され、人が住めないという緊急事態となってしまう。

今年４月から６月にかけて行われた、２０２４年原子力空母交代市民アンケートでも、原子力空母の原子炉と安全対策に関する情報が不十分であることを懸念する意見、また有事に原子力空母とその母港が攻撃対象となることを懸念する意見が多数集まった。

私達は、この３千人アンケートによって示された横須賀市民の懸念も受けて、原子力空母母港の１日も早い撤回を、米国政府、米海軍、日本政府、横須賀市に強く求めるものである。